

山吹のみの一つだに

——太田道灌 雑感——

森田 孟

もう、ここ何十年来しばしば、何かの拍子に、何の脈絡もなく、脳裡に浮かぶ間もなく口を衝いて出てくる短章がある。

「道灌の死後二百余年、世は元禄となつて、江戸は京都、大阪と共に華やかに栄えた。」

というものである。堺の、だったか酒田のだったかの港云々と続いたような気はするが、この後は全く記憶がない。中学生になつたばかりの頃の、国語か社会科の教科書に出てきた、確か芭蕉の『奥の細道』が話柄の文章の冒頭部であつた。

何故この一節が私の身についたのか、その理由はまず、

この章句の調子の良さ、流麗な構文のせいであろうが、何よりも、いきなり出てくる人名が原因なのは疑いない。

教科書では、太田道灌（一四三三—一八六）が主題でなかつたせいで、授業では、江戸城を築いた室町時代の勝れた武人としてしか説明されなかつたが、この人に纏わる有名なエピソードは、私の母が教えてくれた。

道灌——無論、剃髪後の名前であるが、ここではこの名で通すことにする——が、まだ若年だったある日のこと、所用で遠出をした帰りに、山里で俄雨に遭遇した。辺りを眺めると、一軒のあばら家が目に入ったので、雨宿りにと軒下に駆け込んだ。

すると屋内から、鄙には稀な美少女が一人、楚楚たる風情で現れて、折から垣根に花盛りだった山吹の一枝を折り取り、羞じらいながら悲し気に差し出すなり、再び静かに姿を消した。道灌青年、言葉もなく、唯どきまぎするばかりだった。

その後彼は、朋輩たちとの談笑の折に、あの体験を些か照れながら披露して、この私にも一目惚れしてくれた美しい娘がいたと自慢した。すると、日頃文雅の徒として仲間うちでも一目置かれていた一人に憫笑された。

君もお目でたいな、それはね、「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき」という古歌があつてね、雨具をお貸ししたいのは山々なれど、お恥しいことにご覧のような貧しい生活で、糞の一つも持ち合せがなくて申訳ありません、とその娘は詫びたのだよ、と。

道灌は驚きの余り茫然として、あのような見窄らしい陋屋に住む田舎の少女にも、それ程の教養があつたのかと、我が身の無学をひたすら恥じ入った。以後、武骨一点張りだった彼は大いに発奮して学問にも励み、今に知られるような文武両道に秀でた名武将になったのだ、と、まあ、当時三十代後半に差しかかったばかりの小学校教員の母は、

色々と粉飾を施し、なかなか巧みな話術を駆使して、多感な少年に育ちつつあった我が息子を、いたく感動させたのだった。

『江戸名所図會』巻四の「山吹の里」では、道灌が鷹狩りに出た時の話（「図會・四・一二六―二七」）になっているが、動物を殺す心象を私に与えたくなくて、母は「用事」での遠出したのだらう。

この挿話には他にも、遠方に住む父親の許に出かけた時という版もあるが、これも、父親を学齢以前に喪くして母親の手一つで養育されていた私への配慮で、ただ「用向きで」とだけ母は語つたに違いない。

道灌が、下剋上を疑う主君に謀殺される非業の死を遂げたことは、後になって自分自身で知ることだが、彼の最後の有様が、尚更私に、道灌への思いを一人募らせた。世に、騙す、謀る、裏切る、ということ程、人間にとってあるまじき破廉恥な所業はない。

件の、「実の」と「糞」とが掛詞になつている古歌とは、四番目の勅撰集である『後拾遺和歌抄』〔成立、一〇八六年〕「新国・二」第十九雑五に、この歌集の全一二一八首中唯一首、中務卿兼明親王の作として撰入されている

「ななへやへはなはさげども山ぶきのみのひとつだになきぞあやしき」(一一五四)

である。「嵯峨の」小倉山荘に退隠中のある雨の降る日に、蓑を借りにきた人がいたので山吹の枝を折って与えた。その真意が分らずに去っていったその人が後日、あの山吹はどういう意味かと人を遣わして問うてきたので、その返事に与えたものだ、という趣旨の詞書がある。結句は「悲しき」ではなく「あやしき」になっているもので、この「あやし」は「見苦しい、粗末なことだ」の意であろう。自らの侘住まいを自嘲した、というよりむしろ、卑下自慢をしたものだろうか。

兼明親王とは、前中書王で、醍醐天皇の皇子(九一四、生)、源朝臣となつて左大臣にまでなるが、貞元年中、時の関白藤原兼通の誣奏により官を辞して親王に復せられ、中務卿に任ぜられた後、一品に進み、永延元年(九八七)七四歳で没した人である。讒によつてこういう、貸してあげる蓑一つない境遇に陥つてはいるが、それにも悠然と甘んじて優雅に暮しているよと。

「あやしき」を「悲しき」に変えたのは、あの少女の、いや、この挿話を創出した人物の咄嗟の機転に依るもの

か、それとも原歌公表以来の長年月のうちに、教養人の間でいつの間にか「悲しき」として適用されてきたものなのか、いずれにしても道灌のエピソードには、見事な使われ方であった。

兼明親王の詩文は、『池亭記』、『本朝文粹』の他、『和漢朗詠集』に六篇収録されているが、その六篇を見ておきたい(「川口」と「新国・二」とでは訓みが、若干異なっているが、ここでは前者に依る)。

九八 「色有つては分ちやすし 残雪の底 情無うしては 弁へがたし 夕陽の中」

中国古典に典拠をもつ
二五六 「豊嶺の鐘の声に和せむとするや否や それ華亭の鶴の警めに奈何」

同じように中国古典が典拠の
二八七 「扶桑あに影無からんや 浮雲掩うて忽ちに昏し 叢蘭あに芳しからざらんや 秋風吹いて先づ敗る」

これはわざわざ「兔裘賦」と記されている。兔裘は、『左伝』隠公十一年に魯の隠公の退隠の地なので、山吹の歌同様、小倉山荘に退隠して作った賦となる。太陽には光

が蘭には芳香があるが、浮雲に掩われれば太陽は暗くなるし、秋の寒風が吹けば蘭も直ちにしほみ衰える、と、作者の心境をよく表しているだろう。

「供養自筆法華経願文」だという、『白氏文集』に典拠がある

二九二 「来つて留まらず 薙籠に晨を払ふ露あり

去つて返らず 檣籬に暮に投る花なし」

人生も人命も移りゆくはかないものだとの述懐は、やはりこの作者その人らしく、譬喩の鮮明ゆえ一際印象深い。

四三三 「迸筭はいまだ鳴鳳の管を抽でず

盤根は纒かに臥竜の文を点す」

成長著しい竹も、まだ鳳凰の鳴き声とまごう音色を発する筈が出来る程には伸びておらず、蟠り張り広がる根も、ようやく、臥している竜のような文様を示し出したばかりだ、とこれも中国古典を一部踏まえながら、私もまだまだこれからだと、捲土重来を期する心意気を示したもののか。

そして

七六一 「鬼を一車に載せたりとも何でか恐るるに足らむ

巫の三峽に棹さすともいまだ危しとせず」

鬼を満載した車に乗っても、その恐ろしさは大したこと

でないし、あの揚子江上流にある巫山峽、明月峽、広沢峽の三峽の急流を舟で渡る危なさも取るに足りないものだ、人間の心の信頼し難さ・危険に較べれば、とは、作者の生涯を想えば如何にもさもありなんと思わせられよう。

若き日の道灌を奮起させたという件の和歌の原歌作者の人となりをも、こうして聊か知ってみれば、また、あの伝説の感慨もそれだけ深まろうというものだ。

その著名な説話を描いた絵も存在し、それに附された漢詩が知られている「漢辞・五四三―四四」。

太田道灌借_レ蓑圖

太田道灌蓑を借るの図

孤鞍衝_レ雨叩_二茅茨_一

孤鞍雨を衝いて茅茨を叩く

少女爲_レ遺花一枝

少女為に遺る花一枝

少女不_レ言花不_レ語

少女言はず花語らず

英雄心緒亂如_レ絲

英雄の心緒乱れて糸の如し

「孤鞍」とは孤りの騎馬武者で、「英雄」共々、無論、太田道灌を指す。「少女言はず花語らず」とは、誠に美しい対句表現で、心の緒が乱れて糸のようになるという縁語手法とも相俟って、一読容易には忘れ難い秀作ではなからう

か。大槻磐溪*の作とも伝えられているが甚だ疑わしく、作者不明だという「漢辞・五四四」。

*幕末から明治初期の朱子学者、蘭医玄沢の子、一八〇一—七八。

山吹に花は咲いても実がならない、と詠う作品は、『萬葉集』に先蹤がある。

「花咲きて実は成らねども長き日に思ほゆるかも山振の花」〔⑩一八六〇〕*（*巻十の第一八六〇番歌の意。以下同様の表記にする）

結婚はとても出来ない高嶺の花ではあっても、と恋しい娘が美しく成人する日を、長い日時にわたって待望する作品と受容する時「新岩」、ひとときわ光を放つてくる。

この、山野に自生するバラ科の落葉低木には種類が多く、確かにヤエヤマブキは八重咲きで果実が出来ないが、一重の山吹は花の終った後に非常に小さい五ミリmぐらいの扁球形の果実をつける。

『萬葉集』には、山吹が現れる歌は十七首存在するが、最初に現れる作品が特に感銘深い。急逝した十市皇女を悼んだ異母兄の高市皇子が詠んだ歌がそれである。

「山振の立ちよそひたる山清水波みに行かめど道の知ら

なく」〔②一五八〕

山吹の花が装いを凝らして咲き盛っている山中の清水を汲みに出かけていったあなたを偲んで、私もそこへ行きたいと思うが道を知らなくて、と嘆きながら、それによって、山吹の「黄」色と山清水の「泉」とが表す、死者の赴く「黄泉」へ行くこうにも道が分らず、亡き人に会う手だてがないという「中根・一五二」痛恨の思いを伝える名歌。

「立ち儀ふ」という表現が、やはり実に素晴らしいといつも思う。

『萬葉集』で「やまぶき」の原字は、先刻の作品及びこの歌のように「山振」（他に⑧一四三五、一四四四、⑩一九〇七、⑪二七八六、⑫四一八五「長歌」）が七首、「山吹」（⑭四一八四、四一八六、四一九七）が三首、「夜麻夫伎」（⑮三九六八、⑯四三〇二、四三〇四）が三首、そして「夜麻扶枳」（⑰三九七二）、「夜麻夫枳」（⑱三九七四）、「夜万夫吉」（⑲三九七六）と「也麻夫伎」（⑳四三〇三）が各々一首ずつの、七通りに表記されている。表記の違いが、山吹と作品全体に及ぼす影響に、思いを致さずにはいられない。

古典落語の演目にも、あの山吹の挿話が使われる「道灌」と題する名作があるのは嬉しい。天保四年（一八三三）

刊の初代林屋正蔵作、笑話本「笑富林」が原話だという
〔興津・二七七―九〇〕。ご隠居さんの所で、歌道に暗かつたことを自ら恥じたという道灌の逸話を教わった八つあんが、早速、雨具を貸すのを断るのに、あの山吹の歌を利用してしようとして惹き起す、冒頭から「笑いも多い絶好の前座
嘶」〔興津・五〇五〕。

八つあんが大雨の最中、通りを凝視めながら、雨具を借りにくる「道灌」を手ぐすね引いて待ち構えているところへようやくやって来た知人は、予期に反して雨具は所持していて、提灯を貸してくれという。「この場ちがいの道灌め！」に無理やりともかく雨具を貸せと言わせるや八つあん、ご隠居にちゃんと教わってきたのに、どういふ風の吹き回しだか、あの歌を

「七重八重花は咲けども山伏の味噌一樽に鍋と釜しき」とやる。お前の考えた勝手道具の都都逸か？ と問い返す相手に八つあん、待ってましたとばかり、「これを知らねえところを見ると、よっぽど歌道に暗えな」、そこで相手、「ああ、角が暗えから、ちょうちんを借りに来た」。

八つあん、とほけているようだが打てば響くなかなか高級な?! とんちんかん反応で、教養のある? ご隠居と渡

り合つてその都度苦笑・爆笑を引き出し、山伏に変えた咄嗟の? あの狂歌? など並みではない。昨今の人々には一度聴いただけでは十分に面白さが分らないかもしれない。これは「読む」落語の典型であろう。

道灌が十三歳の時、初陣に武州小机の城〔室町期の山城〕を攻めた際に詠んだ歌がある。

「小机はまづ手習のはじめにていろはにほへとちりぐにせん」

小机と手習は縁のある語、手習の最初はいろはを習うので、いろはにほへとちりと続け、ちりに散りぐ、敵を撃つてちりぢりにしてしまおうというのを掛けたもの
〔耳・二二四―一五〕。

誰もが即座に、久保田万太郎の有名な句「竹馬やいろはにほへとちりぐに」(大正十五年)を想起するだろう。さては、万太郎先生、あの歌を御存知だった!?

道灌に纏わるエピソードとしては、やはり『江戸名所図會』巻五「図会・五、六・一八四―一八五」に現れるものも忘れられまい。

道灌が上洛時に、後土御門天皇(または、後花園天皇、あるいは将軍足利義政―括弧内「小川・二・六二」)から

下問されて答えた詠として、家記・系譜の類、関八州古戦録、太田道灌雄飛録など江戸期道灌関係書物には、必ずいづれか引用されるほど有名「小川・二・六二」である。

武蔵野の勝景を問われて道灌が

「露置かぬ方もありけり夕立の空よりひろきむさし野の原」と答えると、続いて平生の眺望を訊ねられ

「わが庵は松原つきき海近く富士の高根を軒端にぞ見る」と応えた。

また、ある時、角田川の都鳥についての問いには

「年ふれど我まだしらぬ都鳥角田河原に宿はあれども」

と返事をした、というもの。

「露置かぬ」の歌は、先に触れた「耳・二一五」にも、「太田持資「道灌の名」始て上京之時詠歌の事」として出てくるが、この上洛の挿話についても「小川・二・六二」の検証・考察によれば、〈伝説〉の域を出ないようである。

道灌は武将として甚だ優秀だったようだが、連戦連勝で主家のために奔走した。それが却って仇になったものとみえる。道灌暗殺の原因については諸説紛紛のようだが、要するに彼が有力になりすぎたのだ。

道灌の臨終時のエピソードは、新渡戸稲造が全十七章か

らなる英文の名著『武士道』「新渡部・一」の第四章「勇気 敢為堅忍の精神」(Courage. The Spirit of Daring and Bearing)で取り上げていて、特に知られている。

道灌は文明十八年七月二十六日(一四八六年八月二十五日)、主君扇谷定正の糟屋館に招かれて、浴室から出たところを、刺客に槍で貫かれた。暗殺者は道灌の、殊の他の詩歌好み(poetical predilection)を知っていたので槍で突き刺しながら、

「かかる時こそ命の惜しからめ」

“Ahi how in moments like these

Our heart doth grudge the light of life!”

と呼び掛けた。すると喘ぎながらも道灌は、脇腹に受けた致命傷にも聊かも怯むことなく

「かねて無き身と思ひ知らずば」

“Had not in hours of peace,

It learned to lightly look on life.”

と下の句を付けた「新渡部・一・四二―四三」。

真の勇者は、死の危機に瀕しても従容として詩歌を詠じて、平生どおりに振舞える心の余裕(a sportive element―陽気な要素)を備えている一例として、新渡戸

は賞讃したのである。

ところで『武士道』のおそらく最も早い邦訳と思われる櫻井彦一郎「鷗村」訳「新渡戸・二」では、道灌が戦場で若武者の首級を獲った際に、これを憫んで、

「かゝる時さこそ命の惜しからぬ

かねて無き身と思ひ知らずば」

と和歌を詠じて弔った。が、後に浴室で謀殺された時には泰然として手ずから槍幹を抑えて

「昨日までまゝ、妄執を入れおきし

へんなし袋今やぶりけん」

と狂歌を一首吟じて絶命したという。道灌もまた自ら「かねて無き身と思ひ知らずば」だったから、臨終でこういう振舞いが出たのだらう、ととなっている「新渡戸・二・四二―四三」。この訳書の英文テキストが異なっているのだらうが、私は今、その原文未見なので、この狂歌の英訳ぶりには是非とも知りたい。新渡戸の英文が甚だ立派で、和歌の英訳が巧妙なだけに尚更のこと。

*「へんなし」とは、「何の変哲もない」「つまらない」「甲斐がない」の意。

「かかる時」の歌は、道灌の歌集とされている『慕景集』

「新国・四」の二八番歌にも、『異本慕景集』「新国・八」下の七二番歌にも、それぞれ詞書付で収録されていて、前者の詞書は後者の数倍の長文だが、前者は藤沢の役で味方の中村重頼が、後者は小田原の役で名こや遠江道勝が、各々打ち取った敵の首を自分に見せて、それぞれ、優しい歌の一つもものして手向けよ、この心を詠め、と言ったので、その首に向けて詠んだのだ、となっている。

道灌の辞世歌とされている「小川・二・五六」同じ歌が、自分が獲った首級へのと、味方の武士が取った首への手向け歌だと状況が異なり、更には上句と下句に分けられて暗殺者と自分との掛け合い歌ともなっている。いずれが真実か、要するに判らない。伝説というものの面白さである。尚、道灌が藤沢や小田原で合戦したことは知られておらず、両詞書で挙っている武人は両名とも未詳だという「小川・二・五六」。

掛け合いと言えば、件の新渡戸の『武士道』には、道灌の故事に続いて、これは一層人口に膾炙している前七年の役（一〇五六―一〇六二）の衣川の戦いにも触れている。

逃走する敵将安倍貞任に、源八幡太郎義家（一〇四一―一一〇六）が強弓を引き絞りながら大音声で

「衣のたてはほころびにけり」

“Torn into shreds is the warp of the cloth (*koromo*)” と

言いかけると、貞任は馬を引き返して咄嗟に

「年を経し糸のみだれの苦しさだ」

“Since age has worn its threads by use.”

と前の句を返し詠った。それに大いに感じ入った義家は、そのままこの敵將を見逃した。貞任ほどの剛の者にして初めて、このような優雅な対処ができたのだと讚えて。

新渡戸は、戦いは単に野獸力 (brute force) の問題ではなく知的な合戦 (an intellectual engagement) だとして、ノブレス・オブリージュ〈尊貴の責務〉を説いたのだった。

*

室町中期の武將・歌人で、扇谷上杉定正の家宰を務め、築城・兵馬の法に優れて江戸城を始め河越、岩槻の諸城を築き、江戸城に豊饒な文庫を設け、和歌を飛鳥井雅世に学んだ歌人として多くの文人と交流し、最後は主君定正に謀殺された太田道灌には、数々の説話、エピソード、伝説が纏わり残って、人気が高いのも誠に尤もである。特に、政治家としての道灌の評価が、卓抜な軍事上の才を持ちながら、あくまでも伝統的な公方―管領体制の護持に努めて遂

に戦国大名への脱皮を果せなかったことに落ちつく「小川・二・五四」なら、彼への人々の思いはますます深まることだろう。過渡期を輝かせ成熟させることに終始して過渡期を生き切り、新たな次期の出現を他に委ねるのは、やはり見事な生き方に違いないのだから。

日暮里駅の北改札口を出て東口に降りると、すぐ目に入るのは駅前のバスの待機する広場で、そのバス停の前に、道灌の弓を振り上げた騎馬像「回天一枝」(橋本活道製作)が、高々堂々と立っているのが見上げられる。荒川ライオンズクラブ五周年記念事業として、平成元年(一九八九)十二月吉日に建てられたもので、その台座のパネルには次の説明書がある。

道灌の「山吹の一枝」の故事にちなんで、それを契機に文の道に目覚めた道灌が、まさに回天の勢いで文の道を極めていったことを表現しようとして「回天一枝」という作品名を作者の橋本氏と鈴木俊一元知事がこの太田道灌騎馬像に命名いたしました。

そしてその下に、山吹の里の伝説が記されている。

東京国際フォーラムのガラス棟には、入ってすぐの、地下への降り口の脇に、騎射笠・むかばきで弓を持った狩に

出で発つ姿の道灌像（朝倉文夫製作）があり、開都五百年記念、昭和三十一年「一九五六」四月一日、昭和三十三年「一九五八」二月除幕、と記されている。これはかつて旧東京都庁前にあったものだという。

これらの銅像二体は、都内の大きな駅の近くにあつて、人々のよく知るところであらう。私も今回、改めて出かけてゆき、つくづく眺めてきた。

それで思い立ち、道灌の史蹟を何か所か訪ね回った。毎年十月の第一土・日曜日に観光道灌まつりを催しているという神奈川県伊勢原市は上粕屋の、曹洞宗蟠龍山公所寺・洞昌院の境内の深閑とした一隅にある「太田道灌の墓」。遺体が同院裏手で茶毘に附されたという彼の墓には、宝篋印塔が建立され、墓前左右には六角錐の蓋を被せた松の巨木の切り株があつた。左前方には、道灌が生前交流した心敬僧都の五百回忌記念として、彼の句、「雲もなほさだめある世のしぐれ哉」が、川戸飛鴻の揮毫で彫られた黒い自然石の句碑が、一九七三年四月に建てられていた。

同市下糟屋の、道灌が再興したという臨濟宗建長寺派寺院、法雨山大慈寺の、渋田川沿いの広場に首塚と通称される墓所として祀られている宝篋印塔と五輪塔から成る石造

の供養塔。小田急線伊勢原駅下車、バスでの旅路だった。

さいたま市岩槻区の、岩槻太田氏の菩提寺、曹洞宗の大平山芳林寺は、東武野田線岩槻駅東口から約五百米、徒歩七分の所、その入口に二〇〇七年四月に建てられて高々と躍動する、富田憲三・山本明良（彫刻工房十方舎）製作の道灌の騎馬武者像、とその背後の一米ぐらゐの道灌の狩りの姿の立像、及び境内の奥に慎ましく建つ「道灌堂」。

埼玉県川越市市役所庁舎（川越城大手門跡）の前に一九七二年十月建立の、橋本次郎作、狩人姿の遠くを睨み据えて凜然たる太田道灌公銅像。

東京都墨田区大平一丁目（錦糸町駅から徒歩十五分程）の、日蓮宗平河山法恩寺境内に、江戸築城五百年記念に建てられた「道灌公記念碑」とその奥の「太田道灌公五輪供養塔」。新宿中央公園内に一九七八年四月に設置された、山本豊市製作の「久遠の像」。道灌が武蔵野の原で狩りをした時の伝説の情景だという、立ち姿の道灌と跪いて盆の上の山吹の一枝を差し出す少女との一対の像だった。

そして、豊島区の神田川に架かる「面影橋」の北詰に慎ましくも美しく鎮座する「山吹の里」の石碑。この橋は「柳田・五二八」が、二十四の橋を取り上げた「橋の名と

伝説」で「百数十年來の江戸郊外の一各所」だと述べていた。

爽やかな秋の、三日間にわたる探訪だった。

太田道灌については、既に何度も言及した小川剛生博士の「小川・一」、「小川・二」が必読の文献である。前者には創見、卓見、新説が随所にあり、貴重な図版三七枚入りで、索引完備、参考文献、略年表他、色々行き届いた、名文の名著で読者は感動するだろう。後者には、東京大学総合図書館南葵文庫蔵『太田道灌詠草』を底本とする「なるべく底本の面影を遺すように努め」た「太田道灌自注京進之歌」の全文翻刻が附載されていて、特に貴重である。

道灌の子孫は愛でたいことに、その後も連綿と続き、十八代目の太田資曉氏なる方が健在である。三年ほど前に、認定NPO法人「江戸城再建を目指す会」会長の氏の、「江戸城再建運動に理解を」と訴える一文が、「毎日新聞」(二〇一二年六月二日)の「これが言いたい」欄に掲載された。一六五七年の明暦の大火(所謂、振り袖火事)で焼失したままになっている「家光の建てた寛永度の天守閣」を、現在東御苑にある台座の上に再建して、世界に誇れる天守閣を「観光日本」のシンボルにしようというものだった。子孫の希いとしては宜なるかなと、私も記憶に留めた。

のであった。

*

我が家にも垣に沿って山吹が三本、雪柳と交互に植えられていて、春になるとそれぞれの花の黄と白が競い合って匂い咲く。私の口からは自ずと、遠い日の、教科書のあの一節が、「道灌の死後二百余年、云々」と、洩れ出てくる。山吹は英語で 'a Japanese rose [kerria]'、雪柳は 'a *Thunberg spirea*'、通称 'bridal veil' (花嫁のヴェール) である。

少年の日に、私に道灌を印象づけた母は、米寿を迎えて五か月後、最後まで明晰な頭脳のまま眠るように息を引き取った。今年はそれから丁度十年になる。

参考文献 本稿では「略記(最後の数字はその頁表示)

「図会・四」『江戸名所図會 四』斎藤幸雄著 新典社、一九八四年一月

「図会・五、六」『江戸名所図會 五、六』斎藤幸雄著 新典社、一九八四年一月

「新国・二」『新編国歌大観』第一卷勅撰集編 歌集。角川書店、一九八三年二月

〔新国・二〕『新編国歌大観』第二巻私撰集編 歌集。角

川書店、一九八四年三月

〔新国・四〕『新編国歌大観』第四巻私家集編Ⅱ、定数歌

編、歌集。角川書店、一九八六年五月

〔新国・八〕『新編国歌大観』第八巻私家集編Ⅳ 歌集。

角川書店、一九九〇年四月

〔川口〕川口久雄『和漢朗詠集 全訳注』講談社学術文

庫、一九八二年二月

〔漢辞〕鎌田正・米山寅太郎『漢詩名句辞典』大修館書

店、一九八〇年六月

〔新岩〕佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎

福之 校注『万葉集』(一)～(五) 岩波文庫、二〇一三年

一月～ 待望久しかった新校訂版。第四分冊まで既刊

〔中根〕中根三枝子『万葉の贈る花・伝える歌の本(木の

花編)』白墨舎、一九九六年十月

〔興津〕興津要編『古典落語』(下) 講談社、一九七二年

七月

〔耳〕根岸鎮衛著・長谷川強校注『耳囊』(上)(中)(下)、

の(中)、岩波文庫、一九九一年三月

〔小川・二〕小川剛生『武士はなぜ歌を詠むか 鎌倉将軍

から戦国大名まで』角川学芸出版、二〇〇八年七月

〔小川・二〕小川剛生「太田道灌の伝記と和歌」『文学』

第九巻第三号、二〇〇八年、五三―六九頁

〔新渡戸・一〕INAZO NITTOBE, BUSHIDO : *The Soul of*

Japan : An Exposition of Japanese Thought. With an

Introduction by William Elliot Griffis. (The Leeds &

Biddle Co., Philadelphia ; and also by Shokwado,

Tokyo, 1900).『新渡戸稲造全集』第十二巻(教文館

一九六九年九月)に収録。本稿はこれに拠る

〔新渡戸・二〕新渡戸稲造、訳者櫻井彦一郎「鷗村」邦

文『武士道』丁未出版社、一九〇八年三月

尚、最新の感銘深い評伝は、草原克豪『新渡戸稲造

一八六二―一九三三 我、太平洋の橋とならん』藤原

書店、二〇一二年七月

〔柳田〕『定本柳田國男集』第五巻、筑摩書房、一九六二

年九月

道灌の史蹟の在処とその訪ね方について御教示下さった林洋平

成城大学職員と森田啓千葉工業大学教授に感謝申し上げます。

(二〇一四年十一月)